

琉球大学学術リポジトリ

《英語科》豊かなコミュニケーション能力の育成(1年次) :
主体性を意識したパフォーマンス課題の設定の工夫

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属中学校 公開日: 2021-08-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新崎, 菜々子, 上原, 明子, 知念, 渚, 深澤, 真 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48833

豊かなコミュニケーション能力の育成（1年次）

－主体性を意識したパフォーマンス課題の設定の工夫－

新崎菜々子* 上原明子* 知念渚* 深澤真**

*琉球大学教育学部附属中学校 **琉球大学教育学部

I 主題設定の理由

1 社会的背景から

グローバル化と共に世界規模で解決しなければならない数々の問題に直面し、我々の暮らし自体が変わろうとしている。SDGsのように経済と社会、環境のバランスを保ちながら持続可能な社会を創造することがより切実な課題となり、今後はSociety 5.0というこれまでの延長線上にない、劇的な変化の中で人間らしく豊かに生きていくために、言葉や文化、時間や場所を超えながらも自己の主体性を軸にした学びに向かう能力や人間性が一人一人に問われることになる。

また、次年度より新学習指導要領が導入され、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に移行する。特に「主体的に学習に取り組む態度」については国立教育政策研究所によると五つの領域の側面に加えて、「言語活動への取組に関して見通しを立てたり振り返ったりして自らの学習を自覚的にとらえている状況についても、特定の領域・単元だけではなく、年間を通じて評価する」^①とされている。よって、英語科では主体的な学びと自己調整学習に着目し、豊かなコミュニケーション能力の育成をテーマに研究を進める。

2 これまでの研究から

平成28年度から4年間「質の高いコミュニケーション能力の育成」というテーマで研究を進めてきた。研4年次の成果と課題は、次の通りである。

(1) 成果

- ・単元を通してBig Questionに向かってインプットやアウトプットを積み上げ、パフォーマンス課題で活用できる具体的な場面を設定できた。
- ・評価文の工夫や見取るべき能力をはかる項目を精選

し、教師だけでなく生徒にとってもわかりやすいルーブリックの設定ができた。

- ・CAN-DO Check sheetを活用することで単元における生徒の学びの自覚化に繋げることができた。
- ・継続した帯活動の実施で他者とのやりとりの中で考えを練り上げ、表現を何度も修正でき、質の高いパフォーマンスへ繋がった。

(2) 課題

- ・スパイラル的パフォーマンス課題を各学年に設定するなど、各学年で同じようなトピックに繰り返し取り組むことで、学びや成長を自覚させたい。
- ・「質の高いコミュニケーション能力」を継続的に目指していける課題設定が必要である。
- ・学習苦手群のガイドラインとなり得るルーブリックの工夫が課題。単語や文法の正確さに偏らず、多少の誤りがあっても自分の本当に伝えたいことを伝えようとしているか、ということに着目できる「みとり」を検討したい。

3 本校の生徒の実態

本校の検討会において、本校生徒の英語の授業における学習の課題について「学びに向かう力」という視点で振り返ってみた。間違えたくないから言わない、グループでも発言せずに合わせてしまう生徒が存在する。一見意欲的に授業の活動に参加しているように見えるが、やらなければならない義務感で一生懸命に取り組んでいる生徒も多いような印象が強い。本当に伝えたいことにチャレンジできているのか。積極的だが主体性がないのではないかという指摘もあがった。

本校英語科として、主体性と積極性の違いについて比較し、以下のようにまとめてみた。

- ・主体性：自分の意志や判断で行動しようとする態度。やるべきことが決まっていなくても、自分で目標や目的を想定し、判断・行動する。
- ・積極性：ものごとに対し、自分から進んで関与したり、ある程度以上の意欲や関心を持って取り組める態度。行動のきっかけは自分か他人かを問わない。

新学習指導要領の3つの柱の1つである「学びに向かう力」は従来の学習指導要領で用いられていた積極的な姿勢よりも、主体的に学んでいく力を示していると言える。そこで2020年7月に生徒の積極性と、主体性を調査するためアンケートを行った。学習に対する積極性を引き出せれば、積極的だが主体性が低い生徒の方が多いのではないかと推測していたが、積極性は低いが、主体性の数値が高いという生徒が半数程度いることがみえてきた。発言が少なくても主体的に学んでいる生徒がいるという実態に気づくことができた。

II 本研究の目的

主体性を意識したパフォーマンス課題の設定の工夫を通して、豊かなコミュニケーション能力の育成を図ることを目的とする。

主体的・対話的で深い学びを、前年度までの研究では「思考力」という視点からみてきた。本研究では本質的には今までの取り組みを継続するが、「学びに向かう力」という視点から考えていきたい。

III 目指す生徒像

間違いを恐れず、主体的に自分の考えや気持ちを、場面や状況にふさわしい表現を用いて伝えようと粘り強く努力する生徒。

IV 研究内容

1 研究計画

本校英語科では、以下のように研究計画を立てている(表1)。今年度は、学びに向かう動機付けに着目し、理論研究及び授業づくりに重点をおいて研究を進める。

表1 研究計画

1年次	<ul style="list-style-type: none"> ・臨場感のあるパフォーマンス課題の工夫 ・主体的に学びに向かいたいくなるルーブリックの工夫 ・「豊かなコミュニケーション能力」の定義と育成
2年次	<ul style="list-style-type: none"> ・「豊かなコミュニケーション能力」の定義の見直し ・主体的にリフレクションができるCAN-DOシート・ルーブリックの作成 ・3年間を見通したBig Question・CAN-DOリスト・ルーブリックの作成

3年次	<ul style="list-style-type: none"> ・豊かなコミュニケーション能力をパフォーマンスに生かす自己調整学習 ・研究のまとめ
-----	--

2 英語科における「学びに向かう力」

松永(2017)は、2016年12月の中教審答申をもとに「学びに向かう力、人間性等」を外国語科において次のように整理している。(2)

- ・外国語を通じて、言語やその背景にある文化を尊重しようとする態度
- ・自主的・主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度
- ・他者を尊重し、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、外国語で聞いたり読んだりしたことを活用して、情報や考えなどを外国語で話したり書いたりして表現しようとする態度
- ・外国語を通じて積極的に人や社会と関わり、自己を表現するとともに他者を理解するなど互いの存在について理解を深め、尊重しようとする態度

本校英語科では上記のような豊かなコミュニケーション能力と学びに向かう力の関係性について、以下の2つの視点で考えてみた。

(1)「主体的に学習に取り組む態度」とは

国立教育政策研究所によると、主体的に学習に取り組む態度を見とるとき、「知識及び技能を習得したり、思考力、判断力、表現力等を身につけたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうか」という意思的な側面を評価することが重要である(3)としている。Zimmerman(1986,1989)は、自己調整学習とは「学習者が、メタ認知、動機付け、行動において、自分自身の学習過程に能動的に関与していること」(4)であると定義している。本校英語科では『自己調整学習』をキーワードとして学びのプロセスを以下のようにまとめてみた(図1)。動機付け・メタ認知・PDCAによるTrial&Errorという要素が学びに向かう力となり、主体的・対話的で深い学びとなっていく。ここで働く学びのプロセスが自己調整学習となるのではないかと考える。Zimmerman(1989)は自己調整学習の重要な3つの構成要素として「自己調整学習方略、自己効力感、目標への関与」(5)を挙げている。



図1 自己調整学習のイメージ

(2) 豊かなコミュニケーション能力とは

前年度の研究の中で、多少の誤りがあっても自分の本当に伝えたいことを伝えようとする姿のみとり方の検討や、ルーブリックを手立てに主体性を高める工夫が必要という課題があった。学びに向かう力という視点で考えると、より効果的な学びとなり得るには、生徒自身が「何ができるようになるか」を具体的にかつ豊かにイメージして取り組むことが必要である。本校英語科では豊かなコミュニケーション能力について、感性をはたらかせ、創造的で多様な質の高いコミュニケーションをはかろうとする力と定義した。間違いを恐れず、主体的に自分の考えや気持ちを、場面や状況にふさわしい表現を用いて伝えることができる姿が本校英語科の期待する生徒の姿である。

そこで、本校英語科では、自分が習得したことを次の学びや、今後の人生に生かそうとする「学びに向かう力」を生徒にはぐくんでいくために、前研究テーマであった「質の高いコミュニケーション能力の育成」を今後も継続しつつ、さらにコミュニケーション活動に対する視野を広げて研究をすすめている。1年次は学びに向かう動機付けと、自分で目標を決定し判断・行動する生徒の主体性に着目していく。

3 豊かなコミュニケーション能力をはぐくむ授業実践の2つの柱

「学びに向かう力」と「豊かなコミュニケーション能力」を引き出す工夫について、今年度は自己調整学習における重要な3つの構成要素の1つである動機付けに着目し、外国語を用いて主体的にコミュニケーションを図ろうと思える臨場感のある場面設定とルーブリックの活用と工夫について研究するため、授業実践において以下の取り組みを行った。

(1) 場面設定（臨場感のあるパフォーマンス課題の工夫）

臨場感のあるパフォーマンス課題を工夫することで、生徒もイメージしやすくなり、効果的に相手に伝えるために、主体的に考えたり、工夫したくなることをねらいとして、生徒の興味や関心事に近い場面になるべく近づけるよう工夫している。課題に取り組む中で感じた分かる喜びや、伝える喜び、成長の実感を主体的に学ぼうとする自己調整学習につなげるため、単元を貫く Big Question の先に、Big Question と関連づけ

た臨場感のある場面設定のもと、パフォーマンス課題・パフォーマンステストに取り組んでいる。（表2）

表2 パフォーマンス課題の例

1年	<ul style="list-style-type: none"> ・美ら海水族館のボランティアガイドとして、外国人観光客に沖縄の海の生き物を紹介しよう ・ホームステイ先のお父さんに Zoom で日本の年末年始について伝えよう
2年	<ul style="list-style-type: none"> ・#MY STAY HOME をみんなでシェアしよう ・ジーニーをお願いして海外旅行に連れて行ってもらう ・学校の紹介動画を作成してカリフォルニアと伊江島の中学生に見てもらう
3年	<ul style="list-style-type: none"> ・サンエーで外国人に“What's this?”と声をかけられました。ウェルカムちゅとして、工夫して説明しよう。 ・アメリカの大学から日本の中学生の将来の目標についてインタビュー依頼がきました。将来なりたい自分や目標について語ろう！

(2) ルーブリックの工夫と活用

自分で目標や目的を設定し、判断・行動するにはそのような場面を日々の学習の取り組みの中で実践していくことが必要であり、有効だと考える。そこで以下のように振り返りシートの工夫と改善を行った。

① CAN-DO Check Sheet

毎時間の振り返りでいろいろな視点を与えて本時の学びについて振り返っている。Big Question につながるようなテーマで毎時間1文作成し、パフォーマンス課題に繋げていく。

② ルーブリックの作成

関心・意欲・態度の評価 A の項目を実際に生徒と考えて作成。主体的にコミュニケーションを図ろうとする意識が働くと、パフォーマンスでどのような表現となって現れてくるかという視点で考え、学級でアイデアをシェアした後、既存の評価の観点に書き加え、パフォーマンスのゴールを生徒と教師で共有している。

③ My Goal

今回の単元のパフォーマンス課題において自分が達成したい目標を自分で設定する。漠然としたものではなく、ちょっと頑張れば届く目標を考えるようにしている。目標に近づくために、何を努力すればいいのかを吟味し、決めたことに対して工夫したり努力できるきっかけを与えるようにしている。

④ New Question

単元における疑問やパフォーマンステストで感じた疑問など、今回の学習で生まれた新たな問いを書き留めておく。次の学びの種となり、授業だけで終わらない主体的な英語の学びへの動機付けへと繋ぐ。

V 授業実践

1 1 学年実践事例 (10 月実施)

(1) 主題

PROGRAM6 由紀のイギリス旅行
(SUNSHINE ENGLISH COURSE 1 開隆堂)

(2) 目標

外国人家族に沖縄のおすすめスポットについて伝えるために、相手の立場に立って、満足してもらえるような場所を自ら主体的に追及する。外国人家族の紹介文の内容を読み取り、整理し、その魅力を口頭で伝えることができる。

(3) 本実践の目的

相手の気持ちや考えを理解し、相手に満足してもらえるスポットがどこなのかを自ら主体的に追及する姿の実現を目指す。相手のために「伝えたい」という思いが、「学びに向かう力」につながるような工夫を視点に単元計画を立てた (表 3)。

表 3 単元計画

単元を貫くゴール Big Question 「外国人が満足できる、沖縄のおすすめスポットは？」	
学習内容	
第 1 時 ～ 7 時	由紀のイギリス旅行での会話から、三人称単数形を使い人物や場所を説明する表現を学習する。
第 8 時 (前時)	おすすめスポットを伝える相手についての情報を得る。エキスパート活動では、3つのグループに分かれ、それぞれで家族のメンバー (父・母・娘) についての情報を得る。
第 9 時 (本時)	ジグソー活動～クロストーク ジグソーグループでエキスパート活動の情報を共有し、キーワードを用いておすすめスポットをどのように伝えればよいのか話し合い、英語で表現する。
第 10 時 (次時)	ジグソーグループで、キーワードを用いて、おすすめスポットの魅力を伝える。 事後活動:個人でおすすめスポットの紹介文を書く。

(4) 実践内容

① 単元で引き出したい学びに向かう力

単元を通して、生徒が ALT の弟家族に親近感を持つような活動を行い、相手に「満足してもらいたい」という気持ちを引き出したい。そこから、どのような方法を使えば、相手がより「喜べる・楽しめる場所」を探ることができるのかを自分たちで話し合わせ、おすすめスポットを自ら主体的に追及し、表現する姿を

引き出したい。

② 単元における「学習課題」Big Question(BQ)

BQ「外国人家族が満足できる、沖縄のおすすめスポットは？」に対する解を、仲間と話し合い、アイデアを出し合いながら考えを深めていく学習を計画した。ペアやグループ活動の中で表現したり、意見交流したりする機会を休校明けの 6 月から段階的に増やし、内容のレベルを上げるようにしている。

本時の最後に生徒が上記の課題に対して、口頭で表現できるようになってほしい、期待する解は次の通りである。

期待する解:

○○ and ○○ are good places. Father is interested in history. He can learn Okinawan history. He also likes music. Mother loves dancing. They can enjoy Okinawan Eisa and Okinawan music at ○○. Brooklyn is active and she likes sports. So she can enjoy swimming in Onna Village.

その際、生徒の主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度のポイントは次の通りである。

【A の要素】

- ①「おすすめスポット」について、相手に喜んでもらえるような場所や相手が満足できる理由などを具体的に説明している (本時)
～次時は、以下の 2 点をプラス～
- ②写真やキーワードを効果的に使用している
- ③相手にわかってもらえるような工夫 (アイコンタクト・ジェスチャー) をしながら伝えている。

③ パフォーマンス課題の工夫

パフォーマンス課題では、やりとりや表現を伝える相手を明確にして、実際に起こりうる状況を設定した。本単元では、実際に沖縄に来る計画をしている ALT の弟家族から、おすすめのスポンがどこなのか相談があったので、アドバイスをしてあげるという設定であった。臨場感のある場面設定にするために、ALT の弟家族が来沖する時期や滞在期間をより具体的に設定した。また、単元を通して、ALT の家族についてのスモールトークや Q&A、自己紹介文や写真などを活用して現実味を与えることで、生徒のモチベーションが上がるように工夫した。

④ ルーブリックの工夫

ルーブリックを表 4 のように、「内容」と「主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を評価する項目として生徒へ事前に提示した。また、「なりたい自分」に向けて、どのように目標を達成させていきたい

か、ルーブリックをもとに「My Goal」を設定させることで、学習の見通しを立てさせる。生徒が実際に書いた「My Goal」には『気に入ってもらえるスポットを探す。誰かがやっているのを見て参考にする』や『アイコンタクトを大切にできる人』など、それぞれが自分の克服したい課題を目標にしていることが伺えた。また、「言いたいけど言えなかったこと」を CAN-DO シートに記入させ、学習の過程で自ら答えを追求し、表現できるようになる喜びや、もっと知りたいという動機付けをしていった。

表4 Program 6 ルーブリック

【表現】内容	
A	おすすめのスポートについて、相手にわかってもらえるように、キーワードをもとに理由や説明を加えながら、詳しく効果的に伝えている。
B	おすすめのスポートについて、相手にわかってもらえるように、キーワードをもとに、理由や説明を加えながら伝えている。
C	おすすめのスポートについて、助けがあれば、なんとか伝えている。
D	おすすめのスポートについて、助けがあっても、伝えることが困難である。
【興味関心】	
主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度	
A	相手にわかってもらえるように、適度なアイコンタクトやジェスチャーを交えながら、写真や絵などを使って自分なりに考え、工夫して伝えようとしている。
B	相手にわかってもらえるように、アイコンタクトやジェスチャーを交えながら、写真や絵などを使って伝えようとしている。
C	助けがあれば、相手にわかってもらえるように、なんとか伝えようとしている。アイコンタクトやジェスチャーに課題がある。
D	相手にわかってもらえるように、表現しようとする態度が乏しい。

(5) 実践の考察

① 授業前後の変容（ワークシートから）

生徒の事前と事後に書かれた記述内容を比較する。以下の表5は、2名の生徒の変容である。

表5 生徒による記述例(原文ママ)

生徒A	【事前】 美ら海水族館 is good.
	【事後】 We have a lot of interesting places in Okinawa. 国際通り, 首里城 are good. 国際通り has music store. Brooklyn and Father can enjoy 国際通り and 国際通り has many restaurant. Mother can enjoy 国際通り. 首里城 has history. Father can enjoy 首里城.

生徒B	【振り返り】 私は、理由とか言うのも苦手でジェスチャーもやれる自信がなかったから、目標はBにしたけど、わからないところを聞いたり、ジェスチャーやアイコンタクトなどの練習をしたりしました。そしたらAだったのでうれしかったです。
	【事前】 emerald beach is good. 【事後】 Murasakimura is good. We can learn Okinawa history. We can enjoy tradition industry. We can make Ryukyu glass. We can make chinskou. 【振り返り】 人の目を見て話して、どのくらい理解できているのかなどわかることができたので、次からも（アイコンタクトを）やろうと思いました。

どちらの生徒も、日頃から、授業中の課題などに対して、『英語は全然話せない』『文法やスペルが全くわからないから書けない』などの発言があり、表現することに対して自信がないことが伺えた。2人に共通していたことは、正確さを重視するあまり、間違うことを恐れ、自由に表現することを躊躇していたことである。

「My Goal」を設定させ、それに向かって自己調整しながら進んでいくことで、生徒の意識が「間違ってもいいから伝えたい」という気持ちにシフトしていったと思われる。

② 授業デザインの振り返り

ルーブリックを単元導入時に生徒と共有し、それをもとに My Goal を設定させることで、ゴールがより明確になり、生徒が主体的に課題に取り組む姿がみられた。また、臨場感のある場面設定をすることで、生徒の「相手に伝えたい」という気持ちが高まり、授業外でも課題に対して取り組んだり、より相手に伝わるような工夫を行うなど、主体的に活動している様子が見られた。パフォーマンステスト後の振り返りでは、95%の生徒が「パフォーマンスでは、効果的な伝え方ができるように自分なりに考え工夫した」と答えており、83%の生徒が「My Goal は達成できた」と答えている。

③ 実践を踏まえた授業の改善点

生徒一人ひとりの「主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度」をどう見取り、どう評価につなげていくかをこれからさらに研究していきたい。また、パフォーマンス課題に取り組む中で、自分で目標を設定し、それに向かってなかなか粘り強く取り組めない生徒に対してどのような手立てをしていくかについても、今後力を入れて取り組んでいきたい。

2 2 学年実践事例 (10 月実施)

(1) 主題

Program6 A Work Experience
(SUNSHINE ENGLISH COURSE 2 開隆堂)

(2) 目標

自身の職場体験の思い出やこれからの未来に求められる職業について考え、自分の思いを伝える効果的な手段として不定詞を活用し自分の将来の夢や将来つきたい職業について相手に主体的に伝えることができる。

(3) 本実践の目的

現在ある様々な職業について考えると同時に、将来についても多面的・多角的に考える視点を与えることでより具体的にみえてきた自分の将来について、理由や根拠をもって効果的に相手に伝えることができるようにすることが本実践の目的である。

単元計画は以下の通りである。(表 6)。

表 6 単元計画

靴を貫く「ホム」BIG QUESTION :	
「2030 年の自分の将来の夢やビジョンを効果的に伝えるには」 パフォーマンス課題: インタビューで自分の将来の夢や目標を伝えよう	
学習内容	
第 1 時～ 第 6 時	教科書本文から職場体験について読みとる。考えを表現する際に使える言語材料を学ぶ。
第 7 時 (前時)	2030 年の自分の将来やビジョンについて簡単な英文で考えを表現する。[知識構成型ジグソー法①エキスパート]
第 8 時 (本時)	自分たちの考えを具体的に英文で説明する。 [知識構成型ジグソー法②ジグソー活動&クロストーク]
第 10 時 (次時)	パフォーマンス課題に取り組む。 インタビューで話す内容を整理する。

(4) 実践内容

① 単元で引き出したい学びに向かう力

自分の職場体験の思い出から、将来の職業や目標について意識を向けさせ、ただ漠然と将来なりたい職業を伝えるのではなく、10 年後の 2030 年、AI と共生していくであろう将来に、本当になりたい職業が存在するのか。という問いから自分事として真剣に 10 年後について話し合い、考えを深めていく中で、将来のビジョンを具体化し、理由や根拠を聞き手に熱く語ろうとする生徒の姿を引き出したい。

② 単元における「学習課題」Big Question (BQ)

自分の将来の夢やビジョンを効果的に伝えるためにどんな工夫ができるのか単元を通して考えられるように構成した。単元で学習する表現を必ず使うよう教師側から促すのではなく、将来の夢や目標を伝える時にどの表現が自分の伝えたいことに合うのか、伝えやすくなるのか吟味させ、生徒の判断・選択に任せるよう留意する。本単元の最後に期待する生徒の解は次の通りである。

期待する解 :

I want to be a chef in the future. In the future, we will live with many kinds of robots. But robots can't feel any tastes like we do. So I think chef is very important job in the future. To be a chef, I want to travel many countries and learn a lot of delicious food.

[理由] 将来なぜシェフが必要なのか、そのためにどうすればいいのか、10 年後の未来を具体的に想像した上で理由や根拠が表現されている。

その際、主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度のポイントは次の②の通りである。

A の要素 :

2030 年の自分の将来やビジョンについてできるだけ詳しく工夫して伝えている。※パフォーマンスでは以下の視点で評価

- ① 将来の夢に対する考えや目標などを相手に伝わるように、具体的な例をあげながら詳しく効果的に説明することができる。(表現)
- ② 相手に伝わるようにアイコンタクトやジェスチャーを交えながら工夫して伝えようとしている(関心・意欲・態度)(=主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度)

③ パフォーマンス課題の工夫

生徒がイメージしやすく、モチベーションが上がるような場面設定を心がけた。なりたい職業の将来の姿や自分の描いている将来のビジョンについて生き生きと語る臨場感のある場面として、「琉球大学に調査に来ているアメリカの大学によるインタビュー」という設定とした。日本の中学生を代表して、将来についてどう伝えるのかを考えさせた。

④ ルーブリックの工夫

会話のやりとりを 2 つの観点で評価することを生徒とあらかじめ共有し、今回の取り組みで大切にしたいところにマーカーを入れ、それをもとに My Goal を各自設定させた。自らの達成したい目標に向けてどう取り組むのかを具体的に記述していくことで、自分で学習を調整していこうとする視点が生まれ、それが動機付けとなるよう工夫した。(表 7)

表7 パフォーマンステストにおけるルーブリック

【表現】会話のやりとりの内容	
A	自分の将来の夢に対する考えや目標などを、相手に伝わるように具体的な例をあげながら詳しく効果的に説明している。
B	自分の将来の夢に対する考えや目標などを、相手に分かってもらえるように、説明している。
C	自分の将来の夢に対する考えや目標などを、助けがあれば相手に分かってもらえるように、何とか伝えている。
D	自分の将来の夢について、助けがあっても伝えることが困難である。
【関心・意欲・態度】主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度	
A	相手に分かってもらえるように、適度にアイコンタクトを取り、ジェスチャーなどを交えながら、自分なりに工夫して伝えようとしている。
B	相手にわかってもらえるように、伝えようとしている。
C	助けがあれば、相手に分かってもらえるように、何とか伝えようとしている。アイコンタクトやジェスチャーに課題がある。
D	相手に分かってもらえるように表現しようとする態度が乏しい。アイコンタクトやジェスチャーに課題がある。

生徒の My Goal からは、「将来の生活を想像して、自分の将来の夢とつなげながら伝える」「話を深く伝えたい」「笑顔で相手に興味をもたせ、”Interesting!”と言わせた」など、主体性あふれる様々な目標が自分の言葉で設定されていたのが印象的だった。また、パフォーマンステスト後には、今回の取り組みで生まれた新たな疑問を New Question として記入させ、次の学びへ繋がるよう意識させた。「～より…の方が好きという表現を知りたい」「文をつなげる接続詞をもっと学びたい」など、この先の単元にも繋がる「知りたい」がたくさんつまっていた。

(5) 実践の考察

① 授業前後の変容 (ワークシートから)

本単元での学習を通して、「将来の職業」について深く考え、自分の10年後の将来の夢やビジョンについて、多くの生徒がオリジナリティあふれる英語で表現している様子を見取ることができた。パフォーマンス原稿を本時の活動の事前と事後の原稿の記述をもとに比較する。表8は、2名の生徒の変容である。

表8 パフォーマンス原稿例 (原文ママ)

生徒 A	【事前】 My future is a physiotherapist. Because I can help people.
	【事後】 My future dream is to be a physiotherapist. Because a physiotherapist is a profession of rehabilitates patients. I injured and rehabilitated and I want to become a physiotherapist. Because I was taken care of. AI can help people but I think

生徒 B	only people can be kind to patients. 【考え・工夫したところ】 自分の経験談から将来を伝えられたし、理学療法士はどんな仕事なのかについても伝えられた。
	【事前】 I want to be a soccer player in the future. I want to play soccer with Kubo. So I need to practice very hard. 【事後】 I want to be a soccer player in the future. Because I like to play soccer and watch the game. AI can't be a soccer player but it will be a good judge man. AI can't do cheat. So we can play good soccer in the future. 【考え・思い】 人間が審判をやったら、片方のチームを有利にしたりするところを英語でまとめた。

将来の夢に対して、最初は簡単な英文2～3文で表現していたが、事後においては10年後の様子をより具体的にイメージした上で、将来の夢について自分なりの表現で工夫して伝えようとする姿勢がみえてきた。

② 授業デザインの振り返り

総合的な学習の時間で取り組む予定であった「将来の職業」について、いかに自分事として深く考え、主体的に表現できるか、主体性があればオリジナリティあふれる表現となり得るのではないかと予測を立ててデザインした。知っている英語で何を伝えるかではなく、伝えたいことをどんな英語で相手に伝えるかという視点で生徒達が英語を吟味できていたと思う。

本単元のパフォーマンステスト後のアンケートでは、96%の生徒が「効果的な伝え方ができるように自分なりに工夫した」と答えている。工夫した内容については、「なりたい自分とそのために必要な力を考えた」「将来の夢の理由に AI にはできないということに関係付けて発表した」など、さまざまな工夫があったことが伺えた。

③ 実践を踏まえた授業の改善点

今回は「関心・意欲・態度」と「表現」の2つの観点でみとりを行った。導入した文法や文の正確性の評価より、夢や目標を伝えるのに効果的な表現を自分で吟味できるかというところに着目した。豊かなコミュニケーション力をはぐくもうとすると、伝えたいことにこだわって主体的に取り組んでいる姿勢をどう評価につなげたらいいのか、目標に対し自らの学習を調整しながら試行錯誤する側面をどう見取っていくのかワークシートや振り返りシートの工夫も含めて改善策を見出ししていけるよう実践を重ねて研究していきたい。

3 3学年実践事例（7月実施）

(1) 主題

Program2 Volcanoes in Japan
(SUNSHINE ENGLISH COURSE 3 開隆堂)

(2) 目標

名所史跡や沖縄の歴史など、他教科で得た知識の活用を含めた内容となる。また、受身形や現在完了形を理解し状況に応じて適切に使い、身近な名所や史跡について説明文を加えながら、相手を意識したプレゼンテーションをすることができる。

(3) 本実践の目的

プレゼンテーション原稿を作成する際に、既習事項を活用しながら、相手に伝わる表現や相手に興味を持ってもらえる内容を自ら追求し続ける姿の実現を目指す。学びに向かう力をはぐくむ工夫を視点に単元計画を立てた（表9）。

表9 単元計画

単元を貫くゴールBIG QUESTION： 「沖縄が世界に誇る名所史跡の魅力効果を伝えるには？」	
パフォーマンス課題： 沖縄の名所史跡の魅力 You Tube で発信し、「いいね」スタンプをもらおう！	
学習内容	
第1時 ～ 第6時	ペアやグループ活動を取り入れ、短い英文で説明retellingができるようにする。実際の使用場面を意識した具体例を示し、思いや考えを表現する際に使える言語材料を学ぶ。
第7時 (本時)	ジグソー活動を通して、違う視点からの考えを共有させ、効果的な表現内容を深める。
第8時 (次時)	これまでの学習を参考にマッピングや相互アドバイスなどで考えを整理しオリジナルの紹介文を準備する。
第9時	パフォーマンス課題に取り組む。

(4) 実践内容

① 単元で引き出したい学びに向かう力

沖縄の名所や史跡などについての情報や魅力について、伝えたい情報を整理し、自分の考えや気持ちを付け加えていくなど、主体的に取り組む態度を引き出したい。さらに、聴き手に配慮しながら伝え方の工夫を追求し表現する姿を引き出したい。

② 単元における「学習課題」Big Question (BQ)

Big Question に対する解を、仲間と話し合い、思考しながら考えを深めていく。個の学びを他者との対話によって、考えや視点を広げ、より深く追及していくための協調・協働を促すことで、「学びに向かう力」をはぐくむ機会となるよう工夫をした。最終的には自分の考えを再構成し、豊かな表現に繋げていく授業実践を試みた。

本単元の最後に生徒が上記の課題に対して、話せるようになって欲しい期待する解は次の通りである。

期待する解：
Have you ever visited Okinawan castle?
This is Nakagusuku castle. It is in the center of Okinawa.
Nakagusuku Castle was completed by Gosamaru (Okinawan hero) in 1440. It is very beautiful stone castle.
The castle is near our school. I have visited there 3 times. The scenery from there is very beautiful. If you go there, you can see the beautiful sea and sky.
There is a good restaurant near Nakagusuku castle. It is King Tacos. You can eat delicious taco-rice.
Let's enjoy Okinawan history and Okinawan food.

その際、主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度のポイントは次の通りである。

Aの要素：
①身近な史跡「中城城跡」について、説明文を加え、相手を意識したプレゼン原稿になっている。(本時)
～パフォーマンスでは、以下の3点をプラス～
②沖縄の名所や史跡の魅力、文化の特徴を含めてプレゼンしている。
③イラストや写真などを効果的に示し、自分の考えや気持ちを加え、相手に興味を持ってもらうことができている。
④語彙や文法が正確でクラスメイトが聴いても分かりやすい内容である。
*2分程度の内容で文章を構成しているが、上記の要素がほとんどない場合はB。

③ パフォーマンス課題の工夫

実際の使用場面を設定し、「場面」や「状況」が考えやすい課題設定を意識した。単元計画当初は『沖縄の名所史跡の魅力 You Tube で発信しよう！』という課題を設定した。しかし、主体的に取り組むようになる、より臨場感のある課題を考えさせた結果、最終的には『沖縄の名所史跡の魅力 You Tube で発信し、「いいね」スタンプをもらおう！』と設定しなおした。単元における「期待する生徒像」CAN-DOを「身近な観光スポットを、その文化や特徴を加えて紹介できる」、とした。

④ ルーブリックの工夫

ルーブリックの観点を2つに絞り、単元で働かせる「見方・考え方」がルーブリックに反映されるよう作成した。以下に示すルーブリックを生徒へ事前に提示

し(表 10)、生徒自身が意識したい部分にマーカーを入れるようにした。目指す姿を教師と生徒で共有して授業に臨むことで、学習苦手群の生徒にも主体的に取り組めるガイドラインとなるよう考えた。

表 10 パフォーマンステストにおけるルーブリック

〔表現〕 内容	A	自分の考えや気持ちを加え、相手に興味を持ってもらうことができるように、沖縄の名所や史跡の魅力を、文化や特徴を含めて効果的にプレゼンしている。
	B	相手に興味を持ってもらうことができるように、沖縄の名所や史跡の魅力を、文化や特徴を含めてプレゼンしている。
	C	沖縄の名所や史跡の魅力について助けがあれば何とか伝えようとしている。
	D	沖縄の名所や史跡の魅力について助けがあっても伝えることが困難である。
〔興味関心〕 効果的な プレゼン の工夫	A	相手意識をもって、イラストや写真などを効果的に示している。相手に気持ちを尋ねるような問いかけをしている。
	B	相手意識をもって、イラストや写真などを使っている。
	C	イラストや写真を使っているが、工夫が必要。
	D	イラストや写真がなく、工夫が足りない。

さらに今年度は、生徒に **My goal** を各自設定させ、今回の単元でつけたい力、できるようになりたいことを、主体的に考えさせるよう工夫した。

(5) 実践の考察

① 授業前後の変容(ワークシートから)

本単元での学習を通して、既習事項を活用しながら、相手に伝わる表現や相手に興味を持ってもらえるような内容の工夫を自ら追求し続ける姿がみられた。

本時の活動の事前と事後の原稿の記述をもとに比較する。表 11 は、2名の生徒の変容である。単元テストや定期テストなどでは平均点の生徒である。

表 11 パフォーマンス原稿例(原文ママ)

生徒 A	【事前 before】 This is Nakagusuku a castle. It is in the village of Nakagusuku. It was built by Gosamaru. It has been on the World Heritage List.
	【事後 after】 This is Nakagusuku a castle. It is in the village of Nakagusuku. Nakagusuku-aji began to built it 14 century. It was built by Gosamaru in 1440. It has been on the World Heritage List in 2000. There is Rycome near it. If you go there, you can enjoy shopping too. Why don't you go to Nakagusuku-jo? 【考え・思い】 最後に呼びかけを入れた。before では作った人だけしか書いてないが、after では、もう少し詳しく特徴を加えて魅力を伝えることができた。
生徒	【事前 before】 Nakagusuku castle is in the south of Okinawa. It has

B	been on the World Heritage List since 2000. 【事後 after】 Have you been to Nakagusuku-jo? Nakagusuku-jo is in the central part of Okinawa. It is near our school. In 1440, it was built by Gosamaru. It has been on the World Heritage List since 2000. Nakagusuku-jo is on the top of the hill. It has wonderful view. Please visit there some day! 【考え・思い】 相手を意識して問いかけを入れた。歴史、眺めなどの視点で中城城を紹介した。歴史に興味がなくともきれいな景色を見たいと思うかな、と思った。
----------	---

② 授業デザインの振り返り

年度当初、学びに向かう力「主体的に学習に取り組む態度」を考えたときに、「間違いたくない」「自信がない」「正解不正解を気にする」という生徒の姿が気になった。実際に、6月に実施したアンケートで「間違いを怖がらずに話すことができていると思う。」という問いに対して、115人中、24%(28名)が「そう思わない」「あまりそう思わない」と回答している。そこで、「間違いを恐れず主体的に自分の考えや気持ちを表現できる」よう、伝えたい場面設定に視点を置き、パフォーマンス課題やルーブリックの内容を設定した。パフォーマンス後の振り返りには、「その場で伝えられる言葉で発言できたと思うので満足。」「You Tube で外国の人たちに紹介するので、会話をするような感じで話せて、楽しくできた。文を読む感じではなく会話のような感じで出来たので、その場でプラス1文などをする事ができた。」という、間違いを恐れるのではなく、伝えたい思いを大切にしたい姿や、主体的に工夫をし続けている姿がみられた。

③ 実践を踏まえた授業の改善点

学びに向かう力「主体的に学習に取り組む態度」をどう見取り、リフレクションとして生徒にどう返し、次の学びへとつなげていくにはどうしたらいいのか、まだまだ模索中である。粘り強い取り組みを行おうとしている側面を支援するだけでなく、自分で目標や目的を設定し、判断・行動できるような自己調整学習を意識した取り組みを考えていきたい。臨場感のあるパフォーマンス課題の工夫をすることで、生徒の伝えたい思いがより高まり、主体的に取り組む動機付けになっているように感じる。動機付けをきっかけに達成感やメタ認知につながるだろうと考えている。また、次の目標を生み出すような振り返りの工夫も、今後、改善検討が必要な部分である。自分自身の成長の実感が持てる振り返りになるよう、さらに研究していきたい。

VI 成果と課題（みえてきたことと次への展望）

1 今年度の成果

豊かなコミュニケーション能力を育成するために、今年度は主体性を意識したパフォーマンス課題の設定の工夫において「臨場感のある場面設定」と「ルーブリックの工夫と活用」の2つの柱で共通実践を行ってきた。成果はそれぞれ以下のとおりである。

(1) 臨場感のある場面設定

生徒自身が、英語を使う場面としてイメージしやすい場面設定でパフォーマンス課題に取り組んだことで、自分の思いを伝えたいという気持ちを引き出し、どんな英語で伝えればいいのか、見方・考え方を働かせて聞き手を意識して表現を吟味する姿や、間違いを恐れるのではなく、伝えたい思いを大切に工夫し続ける姿、授業以外でも課題に向き合う姿など、主体的に取り組む姿が多々みられた。年度末に行ったパフォーマンス課題の振り返りアンケートの内容の一部を抜粋する。

- ・自分のあこがれの人を伝えるのはワクワクしたし、スライドを利用するのも楽しかった。
- ・憧れの人について紹介するのは、言葉を選ばないといけないけど、伝えようという思いがあふれるから楽しかった。
- ・家のパソコンでめちゃくちゃ調べた。すごく頑張ったと思う。
- ・紹介動画の作成では一番色々な英語の引き出しをあげた。

上記のように生徒が意欲的に課題に取り組む姿を見取ることができた。主体性がオリジナリティあふれる表現を引き出し、豊かなコミュニケーションへと繋がっていく可能性を感じることができた。この点からも、「動機付け」は学びに向かう力として、とても重要であると捉えることができる。

(2) ルーブリックの工夫と活用

生徒と教師間で評価の視点を共有することに加え、自己調整学習を促せるような工夫としてMy Goalの設定を行うことができた。生徒自身が学びの方向性を認識し、主体的に課題に取り組む姿が見られるようになった。ルーブリックに記載されているAの評価を十分満たしていても、納得いくまで努力を続ける生徒や、より相手に伝わるよう粘り強く工夫を続ける生徒の姿

がみられた。振り返りにおいても、工夫した点が今までより多面的且つ具体的に記述されるようになった。

英語が苦手とする生徒が自分の目指す評価をBとして設定していたが、主体的に粘り強く取り組んだ結果、Aの評価に達し、高い達成感を得るというケースもあった。この事例を通して、自己調整学習は自身のメタ認知や次への動機づけにつなげる効果があるという期待感を持つことができた。

2 今年度の課題と今後の展望

伝えたい事にこだわって主体的に取り組む姿や、自らの学習を目標に向かって調整しながら試行錯誤する姿をどう見取るのか、という点が今後の大きな課題である。これは「主体的に学習に取り組む態度」の観点の評価にもつながるところである。「主体的に学習に取り組む態度」を独立して評価することが難しい場合もある。他2つの観点との関係性や、単元ごとではなく、ある一定期間で見取るべき側面も必要である。みとりの方法については今後も継続して研究していきたい。

また、3学年を貫いた連続性のある学びの工夫や、ルーブリックやパフォーマンス課題を通して自身の成長が実感でき、粘り強く取り組みたくなるしかけ等、更なる改善に向けて研究を継続していく必要がある。

さらに今後は、小学校英語と中学校英語を繋ぐことも重要な課題であり使命だと言える。小学校とのギャップや重複をできるだけ減らし、継続的な英語の学びを意識した豊かなコミュニケーション能力の育成を念頭に置いて今後も実践を行っていきたい。

引用文献・参考文献

- (1) 国立教育政策研究所 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』 東洋館出版社 2020年3月、p.31
 - (2) 松永努『授業が変わる！新学習指導要領ハンドブック 中学校英語編』 株式会社時事通信出版局 2017年7月、p.31
 - (3) 前掲(1)、p.10
 - (4) 吉田ひと美『外国語習得に成功する学習プロセス』 大阪大学出版会 2017年2月、p.17
 - (5) 前掲(4)、p.17
- ・琉球大学教育学部附属中学校『研究紀要』第32集、2020年